増補改訂 戦後日本文学史・年表

松原新一　磯田光一　秋山駿

増補改訂 戦後日本文学史・年表

松原新一　磯田光一　秋山駿

講談社

増補改訂 戦後日本文学史・年表
一九七九年八月二二日　第一刷発行

著者——松原新一・磯田光一・秋山駿
装幀者——辻村益朗

発行者——野間省一
発行所——株式会社講談社
東京都文京区音羽二—一二—二一　郵便番号一二二　電話東京〇三—九四五—一二一一　振替東京六—三九三〇
印刷所——大日本印刷株式会社　製本所——大製株式会社
定価——一六〇〇円
© 松原新一・磯田光一・秋山駿　一九七九年　Printed in Japan
落丁本・乱丁本はおとりかえします（文1）

0095-163604-2253 (0)

目次

戦後日本文学史

戦後変革期の文学——敗戦から一九五〇年代へ　松原新一　19

第一章　敗戦直後の文学状況　21

高見順・宮本百合子・平林たい子の八月十五日——「近代文学」など相次ぐ雑誌創刊——老大家の復活——新日本文学会の結成——テーマ・セッターとしての「近代文学」派——戦後派作家の登場——「アプレ・ゲール・クレアトリス」の諸作品——多様な文学の流れ

第二章　民主主義文学の出発　30

宮本百合子・中野重治の昂揚感——佐多稲子の苦悩——「配給された『自由』」批判——「国民生活への教師」論——民主主義文学運動の疑問点

第三章　「政治と文学」論争　36
「近代文学」同人の理念——平野謙・荒正人の批判と中野重治の反論——『党生活者』の評価——小田切秀雄「小林多喜二問題」——「政治と文学」論争の問題点と教訓
第四章　文学者の戦争責任　46
「文学時標」の戦争協力者糾弾——小田切秀雄らによる戦争責任の追求——天皇制の問題——中野重治の指摘——三浦つとむ『指導者の理論』——福田恆存の明快な二元論
第五章　戦後派文学の新しさ　55
戦後派作家たちの活躍——「戦後文学」と「戦後の文学」の差異——椎名麟三・大岡昇平・武田泰淳の場合
第六章　転向体験と文学　60
野間宏『暗い絵』の主題——「第三の新しいタイプ」の創造——吉本隆明・武井昭夫の評価——椎名麟三の登場——その転向体験と原罪意識
第七章　戦争体験と文学　71

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c

戦争体験の検証——島尾敏雄『出発は遂に訪れず』——梅崎春生『桜島』——武田泰淳『審判』——武田の加害者としての自覚——大岡昇平『俘虜記』の問題——野間宏『顔の中の赤い月』『崩解感覚』——遠藤周作『海と毒薬』へ

第八章　無頼派の文学　84

権威への反抗・坂口安吾ら——『堕落論』「デカダン文学論」——太宰治の破滅への経路——『トカトントン』「如是我聞」など——織田作之助と田中英光——石川淳と石上玄一郎——伊藤整『鳴海仙吉』と『小説の方法』——本多秋五・平野謙の伊藤への疑問——山室静「デカダンスの文学」

第九章　「マチネ・ポエティク」の人々　93

中村真一郎・福永武彦・加藤周一『1946・文学的考察』——中村光夫の支持——荒正人の激しい批判——「マチネ・ポエティク」派の弱点

第十章　異端の文学者　98

埴谷雄高『死霊』——安部公房の新しさ——島尾敏雄の諸作品

第十一章　二つの典型　106
吉本隆明の戦後文学批判――「戦後文学は何処へ行ったか」『高村光太郎』――三島由紀夫『仮面の告白』から『金閣寺』へ――井上光晴の共産党体験――『書かれざる一章』のモティーフ――戦争体験の検証『虚構のクレーン』など

第十二章　国際政治のなかの人間　114
朝鮮戦争、下山・三鷹・松川事件の発生――堀田善衛『広場の孤独』――『記念碑』『歯車』

第十三章　松川裁判とチャタレイ裁判　122
松川裁判批判運動――広津和郎『松川裁判』の客観性――広津和郎・中村光夫の『異邦人』論争――佐多稲子の福田恆存批判「松川無罪確定の後」――伊藤整訳『チャタレイ夫人の恋人』裁判の経過――「言語・表現の自由」問題――福田恆存らの弁論――伊藤整『裁判』

第十四章　民主主義文学の展開　131
宮本百合子の活動――佐多稲子の戦後――中野重治――『むらぎも』から『梨の花』へ――杉浦明平の記録文学――金達寿・西野辰吉・大西巨

人——長谷川四郎の位置——小林勝・山代巴・平林たい子・壺井栄

第十五章　実在の文学　137

私小説の根強さ——上林暁・尾崎一雄・外村繁——藤枝静男・川崎長太郎・木山捷平・小山清・耕治人・網野菊——私小説と心境小説の共通点と相違点——尾崎一雄『虫のいろいろ』——檀一雄『リツ子・その愛』『リツ子・その死』——上林暁『聖ヨハネ病院にて』——三好十郎の批判「『日本製』ニヒリズム」——井上靖の高度の大衆性——田宮虎彦の短歌的リリシズム——井伏鱒二のユーモアと市民性——富士正晴・丸岡明・きだ・みのる・永井龍男・中山義秀・駒田信二・八木義徳——風俗小説の隆盛——丹羽文雄・石川達三・舟橋聖一・井上友一郎・石坂洋次郎・田村泰次郎・北原武夫——十返肇『贋の季節』と中村光夫『風俗小説論』——阿部知二の良識と知性

第十六章　戦後批評の動向　150

「近代文学」派の志向——その活躍と代表的諸論文——花田清輝と福田恆存——伝統的リアリズムの検討——伊藤整『小説の方法』、中村光夫『風俗小説論』、平野謙『芸術と実生活』——外国文学者の批評活動——桑原武夫・中野好夫・中島健蔵・竹山道雄・高橋義孝——竹内好「近代主義と民族の問題」の問題提起

第十七章　戦後文学の発展　159
原民喜の自殺――昭和二十四年前後の文学状況――戦後派に対する中村光夫・西村孝次の批判――平田次三郎「『戦後文学』宣言」――戦後文学発展の第二段階――大岡昇平の姿勢――『真空地帯』が描くもの――武井昭夫の批判――富士正晴の指摘――武田泰淳『風媒花』――竹内好の批判――椎名麟三の「愛」――梅崎春生の感性――「第三の新人」世代へ

戦後文学の転換――講和条約から一九六〇年代へ　磯田　光一　179

第一章　講和条約後の底流　181
講和条約と血のメーデー――竹内好の周辺――山本健吉『古典と現代文学』――深沢七郎の登場――十返肇の文壇崩壊論
第二章　「戦中派」登場の周辺　187
村上兵衛「戦中派はこう考える」――吉本隆明の戦争体験と戦後派批判――「第三の新人」の位置づけ――島尾敏雄における戦争と家庭

第三章　戦争文学の分極　196
安岡章太郎の屈辱感――『遁走』の特色――「第三の新人」の原型とは――井上光晴『ガダルカナル戦詩集』の周辺――阿川弘之と戦争文学――吉田満『戦艦大和の最期』

第四章　孤独と自己救済　206
文士気質の問題――吉行淳之介『驟雨』――新しい性文学へ――遠藤周作『白い人』と『黄色い人』――丸谷才一『エホバの顔を避けて』――北杜夫『夜と霧の隅で』――瀬戸内晴美

第五章　戦後的不安の文学　218
小島信夫の出発――『アメリカン・スクール』の位置――庄野潤三『静物』の周辺――三浦朱門らの活躍

第六章　『太陽の季節』とその周辺　227
石原慎太郎芥川賞受賞の反響――行為とニヒリズム――開高健『パニック』の周辺――小田実の初期――曾野綾子と有吉佐和子――倉橋由美子の進出

第七章　大江健三郎と江藤淳の登場　236
大江健三郎『死者の奢り』と『芽むしり仔撃ち』――「性的人間」の問題――江藤淳『夏目漱石』の登場――生活者の思想と成熟

第八章　戦後批評の屈折と多様化　246
小林秀雄の戦後――河上徹太郎――中村光夫「占領下の文学」の波紋――奥野健男『太宰治論』――佐伯彰一・篠田一士の初期評論――服部達らと「メタフィジック批評」――中村光夫『二葉亭四迷伝』と平野謙『芸術と実生活』――福田恆存の芸術観――山本健吉――本多秋五と山室静――寺田透の周辺――渋沢龍彦『サド復活』

第九章　既成作家の成果(Ⅰ)――老大家の円熟　258
当時のジャーナリズム状況――谷崎と荷風――白鳥・春夫・犀星――里見弴と久保田万太郎――川端康成の美的達成――井伏鱒二――尾崎一雄その他

第十章　既成作家の成果(Ⅱ)――中野重治から井上靖まで　267
左翼文学者の円熟――中野重治『むらぎも』と『梨の花』――佐多稲子の展開――円地文子『女坂』の出現――幸田文・芝木好子・大原富枝

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c

——宇野千代と北原武夫——高見順の中期——伊藤整『日本文壇史』——阿部知二——石川淳『紫苑物語』——丹羽文雄——舟橋聖一——井上靖——永井龍男——和田芳恵と野口冨士男

第十一章　既成作家の成果(Ⅲ)——戦後派とその周辺(1)　280

大岡昇平株の上昇——『野火』『花影』『朝の歌』——三島由紀夫の中期——『禁色』『金閣寺』から『鏡子の家』へ——野間宏『さいころの空』——椎名麟三の中期——武田泰淳『森と湖のまつり』——堀田善衛と木下順二——中村真一郎と福永武彦——梅崎春生と藤枝静男

第十二章　既成作家の成果(Ⅳ)——戦後派とその周辺(2)　295

花田清輝の特異性——埴谷雄高の悲哀——花田の周辺と杉浦明平・長谷川四郎——安部公房の中期作品——『けものたちは故郷をめざす』から『砂の女』へ

第十三章　戦後詩の新風　302

「荒地」の立場——鮎川信夫と田村隆一——「歴程」系・山本太郎——吉岡実と大岡信

第十四章　「純文学」像の変容　305
私小説の興行化——松本清張らの発言——平野謙の波紋——大岡VS平野
——「戦後文学」論争から「政治と文学」論争へ

補論——一九六〇〜七〇年代文学略史　311
序説——安保体制と経済成長　311
第一節　脚光を浴びる老人文学　312
谷崎と川端——犀星『われはうたへどやぶれかぶれ』——伊藤整『変容』
——上林暁——尾崎一雄『まぼろしの記』
第二節　昭和十年代作家の円熟　314
高見順『いやな感じ』——阿部知二——昭和の硯友社とは——舟橋聖一
の作品——丹羽文雄『一路』『有情』——井上靖『風濤』『おろしや国酔
夢譚』——井伏鱒二『黒い雨』——檀一雄——石川淳『至福千年』
第三節　戦後派作家の円熟　316
先行者・中野重治——『甲乙丙丁』——野間宏『わが塔はそこに立つ』
『青年の環』——ベトナム戦争と戦後派——大岡昇平『レイテ戦記』から
『事件』へ——武田泰淳『富士』など——堀田善衛『若き日の詩人たち

の肖像』――中村真一郎『夏』――椎名麟三――梅崎春生『幻化』――福永武彦『死の島』――花田清輝の小説――埴谷雄高『死霊』

第四節　ナショナルなものの分極　321

三島由紀夫――『憂国』から『豊饒の海』へ――川端康成の死――反三島的ナショナリズムの諸相――吉本隆明『共同幻想論』など――井上光晴の虚構意識――大江健三郎の想像力と作品――高橋和巳の主題――開高健『輝ける闇』など――小田実の小説――安部公房『他人の顔』以後――江藤淳『成熟と喪失』『海舟余波』

第五節　女流作家の成果　326

野上弥生子と網野菊――宇野千代――佐多稲子『渓流』から『時に佇つ』へ――円地文子『なまみこ物語』『朱を奪うもの』――芝木好子の三部作――中里恒子『歌枕』――大原富枝――秋元松代・幸田文――森茉莉――瀬戸内晴美――有吉佐和子――曾野綾子――倉橋由美子――竹西寛子

第六節　私小説の水脈と変容　331

大正作家の晩年――広津和郎――瀧井孝作『俳人仲間』――和田芳恵と野口冨士男――八木義徳・木山捷平・浅見淵――文壇史さまざま――川崎長太郎・耕治人・北原武夫――藤枝静男の新展開――富士正晴・小沼丹・結城信一――島村利正――「第三の新人」の中期作品の特性――安岡・吉行・小島・庄野らの代表作――立原正秋――三浦哲郎――永井龍男『コチャバンバ行き』

第七節　戦後批評の新展開　337
六〇年代の価値観——佐伯彰一『日本の「私」を索めて』——奥野健男『文学における原風景』——篠田一士『伝統と文学』など——既成批評家の晩年——小林秀雄『考へるヒント』『本居宣長』——河上徹太郎『吉田松陰』——唐木順三——山本健吉『柿本人麻呂』『詩の自覚の歴史』——平野謙『文芸時評』『純文学論争以後』——中村光夫——亀井勝一郎・保田与重郎——林房雄・竹内好——本多秋五『物語戦後文学史』——荒正人・小田切秀雄・山室静——寺田透——文学研究者と翻訳家たち——中野好夫『蘆花徳冨健次郎』——渋沢龍彦と種村季弘——「群像」新人賞と亀井勝一郎賞——秋山駿・川村二郎など——外国文学者と国文学者の批評行為——山崎正和・大岡信・安東次男

第八節　小説の社会性を求めて　346
社会性とは——批評家の小説——中村光夫『贋の偶像』『グロテスク』——吉田健一『瓦礫の中』『絵空ごと』——臼井吉見『安曇野』——加藤周一と佐々木基一——木下順二『無限軌道』——大西巨人・杉浦明平・長谷川四郎——西野辰吉と霜多正次——深沢七郎と野坂昭如——水上勉『雁の寺』『一休』——山川方夫——北杜夫『楡家の人びと』など——田村泰次郎・吉村昭——古山高麗雄『プレオー8の夜明け』——清岡卓行——小川国夫『海からの光』『或る聖書』——辻邦生『夏の砦』『背教者ユリアヌス』——加賀乙彦『帰らざる夏』『宣告』——丸谷才一

『横しぐれ』『後鳥羽院』

第九節　新世代の作家たち　353

一九六〇年代の読者状況——芥川賞の出身者たち——「内向の世代」評価の分裂——古井由吉・後藤明生・坂上弘——田久保英夫・黒井千次——阿部昭と高井有一——日野啓三・森内俊雄・畑山博・秦恒平——山田智彦・丸山健二——真継伸彦と柴田翔——沖縄と朝鮮——大城立裕・李恢成など——大庭みな子・高橋たか子・富岡多恵子——森万紀子・金井美恵子・津島佑子・林京子・宮尾登美子——岡松和夫・中上健次・高橋揆一郎——村上龍・三田誠広・高橋三千綱——中島梓と中沢けい

日常的現実と文学の展開——一九六一～一九七八　秋山駿　363

第一章　現代人の孤独　365

社会的目標の消滅——「大衆社会」状況の出現——時代変化に対する黒田三郎と内田魯庵の感慨——小田切秀雄の状況論——『セヴンティーン』と『憂国』の問題——孤独な群衆と『砂の女』

第二章　「日常性」登場の周辺　373
「日常性」の意味――庄野潤三『プールサイド小景』『静物』――吉行淳之介と安岡章太郎の位置――『コールガール』と『闇のなかの祝祭』――週刊誌と大衆小説――松本清張のミステリー――水上勉『雁の寺』――佐々木基一「『戦後文学』は幻影だった」――大岡昇平『花影』と風俗の問題――柴田翔『されどわれらが日々――』と空虚さ――山口瞳と大江健三郎

第三章　六〇年代都市社会の成立　384
都市化現象と団地――安部公房『燃えつきた地図』――大江健三郎『個人的な体験』――島尾敏雄『死の棘』における家の問題――小島信夫『抱擁家族』――家庭の解体――安岡章太郎『幕が下りてから』『月は東に』――開高健『夏の闇』

第四章　性における孤独と文学　393
「性」の意味――吉行淳之介『砂の上の植物群』『暗室』――大江健三郎『性的人間』――中村光夫『「わが性の白書」』、河野多恵子『蟹』、野坂昭如『エロ事師たち』――『叫び声』と犯罪――石原慎太郎『化石の森』――佐木隆三『復讐するは我にあり』――アメリカ化の問題――小田実『何でも見てやろう』など――大庭みな子『三匹の蟹』の出現

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c